

「疎外論」と政治経済学の批判

林 喜代三

序 昨年は「マルクス死後100年」という何やら象徴的とも思われる名の特集が多く見られた。今年になっては「マルクス死後101年」という特集をくんだりして彼を再考しようとの試みもみられるが、風潮としては以前とは異なり、脱マルクスの動きが急となりつつあるようにみうける。かつてのその流行が、往々にして主体的に彼の批判の意義を理解した上でのことでなく、体制の権威を批判はしても、ただその批判の権威に従っていただけでしかなく、まさに流行であった面が強いとすれば、そこからの脱権威は望ましいことにも思える。しかしそれが再び脱マルクスの流行にのり別の権威に従っただけとすれば、相変わらず各個人の主体的な判断は欠けたままでしかないことになる。

ところで既成の批判をする場合、批判において相対的に正しさをもつにしても、往々自らへの批判に対しては寛容でないことが多い。権威・権力を批判していきながら、自らが権威・権力になっていくことに疑問をいだかなくなっていく逆説。「反抗の精神を教える者がどうして反抗する者を罰せるのですか？」弱者による批判には相対的に正しさが多い。

マルクスに限らず、およそ何かを研究せんとする者は、時々⁽¹⁾の風潮にかかわらずその理解と活用の道をさぐることを試みるだけで足りる。たとえ結果として、例えば脱マルクスになっていくにしても、各個人にとってはそれなりの批判的「総括」がなされた上でなければなるまい。一連のマルクス理解の試稿の中で、本稿はマルクスの『政治および国民経済学の批判』の草稿、通称『経済学＝哲学の草稿』を再考する試みの草稿⁽²⁾である。いつもの通り彼を単に忠実に解釈しようとするものではなく、理解の主体としての筆者の主観から有用と判断される解の一つをさぐろうとするのみである。問題なのはマルクス自体にあるのではなく、あくまで試みられたその解の内容如何にある⁽³⁾。

1 貨 弊

「貨幣」(『経哲草稿』第三稿の中の一つ)の稿の初めの方で、貨幣の本質を読みとれるゲーテの『ファウスト』からとシェークスピアの『アテネのタイモン』からの引用がされている。

まずゲーテからみると、

「何ですと、べらぼうな、手足や頭と尻、
それは確かにあんたのものさ、
だからといって、しかし、あっしが新鮮に味わうものが、
あっしのものでないわけですかい？
あっしが六頭馬のカネの払えば
こいつの力はあっしのではないのですかな？
あっしが風のように走り、偉丈夫になる、
まるで足が24本あるみたいなもんでさあ。」

(s. 563)

次にシェークスピアをみると、

「金貨？けっこうな、きらめくもの、純金か？いや、神々だ、
私が切に願うのは根もないことではない。
これだけ金があれば黒人を白人に、醜い者も美人にし、悪人を善人に、老人を若者に、
臆病者を勇敢な人に、卑賤の者も高貴な人にする。
こいつは……司祭を惑わして祭壇から誘い、
なおりかけた病人ならふかふかの家具をかなぐり捨てさせる。
そうだこの黄色の奴隷は、聖別した絆を解いたり結んだりし、呪われた奴に祝福を受けもする、
こやつは癲病者を好きにかえ、盗人を榮譽の地位につかせて
跪かせひれふさせ、元老院での
権勢を与える。こやつはまた
年取りすぎた寡婦に求婚者をつれてくるし、
梅毒で傷には膿いっぱい胸くそ悪いと、
施療院から出された女どもをこやつは
香油の五月乙女に若がえらせる。」

呪われた金切れめ、おまえは人間をたらしこめ、
諸国の民の心を惑わすやつだ。」

(ss. 563 — 564)

もう一節あるシェークスピアからの引用はここでは省略するが、これらの中にはまさに貨幣の本質が明らかに叙述されている。貨幣は何でも買えるという固有の性質をもち、自分にはない物も能力もそれぞれ手に入れて自分の物や能力とすることができる。⁽⁵⁾そこで貨幣は全能であり、目にみえぬ神であり、そして人間の生活と生活手段との間の取持ち屋であり、いわば共通普遍な娼婦といえる。それは個々人の個性を失わせ、転倒させる。「諸々の個性の全般的転倒」(s. 556)である。人間の個性を切り離してしまう人間疎外をもたらす。これがブルジョア社会における貨幣の力である。「貨幣はすべての存在をおのれの〔人間から切り離されて〕抽象へ還元するように、貨幣自体の運動の中でおのれを量しかもたない存在におい落す。節度のなくしていることと節度のはずれることとが貨幣の真の度合となる。」(s. 547)

これに対し「人間を人間として、また世界に対する人間の関係を人間にふさわしい関係として前提するならば」⁽⁷⁾愛は愛と、信頼は信頼と、などのようにしか交換することはできない。「君と、人間の——そして自然の——関係の一つ一つは、君の現実にもつ个性的な生のある特定の、君の意志の対象にみあって、表わすはかはない。」(s. 567) 切っても切り離せない個性 Individualität の上に社会主義はある。そこでは「人間の諸々の感覚、諸々の情熱等々がただ〔狭い?〕意味での人間学的規定であるのみならず、真に存在論の上での實在〔自然＝人間〕肯定であり、また「上」のものが現実には肯定されるのは、ただ上のものであって対象が感覚できる形で存在しているということによってだけ」である。(s. 562) 後の『資本論』で問題になる真の個体的所有の意味は(広い意味で)感覚の問題であり、自然 Wesen の肯定であり、単に持つことではなく固有性＝所有 Eigentum であろうことが知られる。物ではなく機能 Funktion⁽⁹⁾であり、対象の中における人間の固有のもの＝力の発現肯定である。

2 疎外された労働

『経哲草稿』は序言にもあるように主にイギリスの社会主義から学び、更にはドイツの「批判」の哲学を活用している。その第一草稿は「労賃」「資本の利

潤」「地代」の三稿が紙に並列して書かれ、最後に「疎外された労働」で締めくくられるという構成になっている。先ず「労賃」から。

2 — 1

「国民経済」(s. 475) 即ち『資本論』の用語では資本制的生産様式の下では、労働者にとって「資本・土地所有と労働との分離は、抜きさしのならない・その身から切り離せない・命をおびやかす分離である。」(s. 471) 国民経済学者(スミス)の言の中に含まれている矛盾に、マルクスは資本制の矛盾を読みとる。資本制社会の孕んでいる矛盾がスミスの筆を通して現われている。したがってマルクスにとって国民経済学の批判は資本制の批判となる。

「国民経済学者〔スミス〕が知らずにその所論の展開から生ずる」(s. 476) こととして、例えば本来労働の生産物はその全てが労働者に属するはずなのに、実際には生産物の極小な部分しか手に入っていない。「国民経済学はプロレタリアを、即ち資本も地代〔土地所有〕もなしにただ労働だけで、しかも一面的・抽象的労働〔ただの労働＝均質化された労働〕で生きる者を、〔人間としてでなく〕ただ労働者としてしかみない。」なんの質もなく切り離された、即ち抽象された労働者、均質性の、従って代替性をもつ、要するに労働の担い手であるだけの労働者。だから「プロレタリアは、ちょうど馬と同じく労働しうだけのものをかせがねばならない。」(s. 477) こうして結果する富と貧困との対立を指摘し、「絶対的貧困は減少するのに相対的貧困は増大する」というシュルツの言を引用する(s. 478)。また、「国民経済学は労働を抽象的に〔生命から切り離して〕事物とみる。『労働は商品である』」(s. 481) 労働は生命であるのに。ところで、「国民経済学のタテマエに従ってさえ、労働は商品ではない、なぜなら『自由な取引の自由の自由な結果』でないから。」(s. 482) 要するに労働力商品の矛盾である。

なおマルクスのスミスからの引用は仏語訳からなされており、前者が後者を学ぶようになったキッカケは、一つには『ヘーゲル法哲学批判序説』からであろうが、一つにはここ労賃論の終りに出てくる2人のフランス人、ベレーとペクールによると予想される。疎外された労働論の源泉の一つに彼らが入るであろう。いわゆる三つの源泉の一つ、フランス社会主義に関係する。とにかく、こうしてスミスを解釈すると、それは富の経済学にちがいないが、他面で貧困

の社会学が経の一本として貫いていることとなる。

2 — 2

次に「資本、即ち他人の労働の生産物に対する私的所有」(s. 483)について。資本とは労働とその生産物とに対する支配力であり、資本家がその力を有するのは人格のないし人間的な諸性質のためではなく、資本の所有者である限りでしかない。労働者が抽象的労働の担い手でしかないのに対応して、資本家もその人間としての性質などからは切り離された抽象的資本家、単なる資本の担い手にすぎなくなっていく。資本の支配力は資本家自身にも及ぶ。(s. 484) 資本の人格化である。

近代資本制社会でもう一つの階級を構成する土地所有者について。資本制の進展の中で地主は資本に駆逐されていき、資本家たちが同時に土地所有者になっていくか、あるいは地主たち自身が資本家になっていくしかない。こうして資本家と土地所有者の間の区別が解消して、従って全体として二つの階級、労働者階級と資本家階級とが存在していくこととなる。⁽¹¹⁾ 土地所有も商品へと転化していき、それは「古い貴族制の最終的転覆と貨幣貴族制の最終的完成」を意味する。(s. 505) そして更には「社会」が抽象的資本家となり、すべて何らかの抽象的労働者となる「絶対的プロレタリア化」の状態も想定される。⁽¹²⁾

ところで土地所有こそ私的所有の始まりであり、基礎である。だが封建的な土地所有ではまだ単に物的な富の関係よりも個性的な関係があり、領主には情味のある一面もあった。貯めるよりもむしろ食いつくしたのであり、まさに臣下に寛大に施すことにより尊敬・臣従されていた。(ss. 505 — 506) スミスも言うように、貨幣経済の滲透により蓄える手段ができ、施すことなく蓄積していくようになる。封建制がゆらぐことにもなる。貴族的な土地所有の外見がはがされ、私的所有の根源たる土地所有が完全に私的所有となり商品となる。ここに人格的関係の外観ははぎとられ、モノとモノとの関係が露わとなる。「カネは主人をもたない」。人間に対するモノの支配が目に見えてくる。(ss. 506 — 506) これが近代文明の姿であり、前近代ではまだ身分関係の中に人格的関係が垣間みられる。この果ては「自由な労働と自由な享楽とによって再び人間のある真実な・人格的な所有」(s. 506) が現われるであろう。むしろ封建的な所有へのあと戻りなどではなく。

2 — 3

国民経済学つまりスミスの諸前提、私的所有の事実から出発したマルクスは「疎外された労働」の稿で、それを説明 *Entwicklung* し明らかにして行こうと試みる。(s. 510) 前者が還元・帰属の方法をとっているのに対して、後者は逆に更に、スミスにとって最後のものをより深いもの・根拠から展開する。演繹・上向の方法である。そして私的所有の本質を疎外された労働にみる。前者の関係を後者の必然的な結果と把える。「疎外」とは、自ら生みだすことによって自分ではない・他のものになることであり、根拠と結果とは媒介されてつながっている。その訳語から疎遠などと類似のものと考えてはならない。それでは両者に縁がないことになってしまう。縁がないなら問題はない。疎外 *Entfremdung* 概念については、マルクスはスミス、ヘーゲル、⁽¹³⁾ペクルルなどから学んだであろう。

この疎外された労働によって「事物世界の価値増大に、人間世界の価値下落が直接比例してすすむ」(s. 511) ことになる。ここでのような対位法的な表現は、ベレーなどにも見られる。労働の実現〔労働を働き出させること〕が、国民経済学的状態〔資本制社会〕では疎外〔自分を自分から切り離して他人のものにすること〕として現象する。(s. 512)

労働の疎外とは、先ず労働の生産物から、次に生活活動から、そして類的存在から、人間が疎外されていること、そしてその直接的帰結として人間からの人間の疎外〔他人＝自分でないものとする〕と規定される。自分に「他の人間が対立」してくることになる。(ss. 517 — 518) 二重の意味での自然、即ち生命および加工対象としての自然から疎外される。そして「人間は類を形づくる存在である」(s. 515) という時、それは多くの類のうちの一つの類であるという外延関係と、個と個の問題である内包関係とを意味し、その類と個体とが切り離され分裂して、相互に手段となってしまう。

労働者の活動が彼にとって苦しみであるなら、他の者〔資本家〕にとってはそれが楽しみである (s. 519) とも言われるが、果して表面的にそう思われる通りにあり得ていけるか。疎外は非労働者〔資本家〕にもある。⁽¹⁵⁾非人間的な力がおしなべて——資本家をも——支配している。(s. 554) 更にまた「絶対的プロレタリア化」が貫徹するのである。楽しみであったにしても、それは人間にふさわしい楽しみをもち得ない。問題はモノにあるのではないから。労働者の

側でも、従って、労賃の平等だけでは「社会」が抽象的資本家となる状態（s. 521）にすぎない。万人の労働者化（=Entmenschenung）であり、社会としての資本家の成立である。また労賃を無理に高めることは奴隷のヨリよい賃金支払より他の何ものでもない。（ss. 520 — 521）賃金上昇だけでは賃金奴隷の状態での改善でしかない。真の問題は疎外の解放にあり、従って私的所有の廃止である。そのうちに人間の解放一般が含まれる。「真に人間にふさわしく社会的な所有」（s. 521）の実現である。労働の疎外と人間の発展の果てに達成される。プルードンの賃金の平等主義についてみれば、それだけでは確かに解決はないが、しかしそれにも一定の評価はせねばなるまい。

このようなモノ的な問題をこえた次元での問題が解決されたなら、むしろ社会は静態化する他なかるう。個体的所有の再建された社会では、一定の発達した生産力に基づいて個々人が自給するのが原則で、それ故労働時間は少なくとも、それで増える自由時間を公共のことや自由な個性の発揮に費やせばよい。 Kommunismusは決して社会（まして国家で）全体を統制管理することではない。そのようなことをすれば『資本論』にあるごとく、全体の管理と個々の管理は反比例して、（資本制でとは逆に）個々の不経済が増大する。個々の経済合理化に基づいて全体としての定常的安定を維持することであろう。必要最少限の社会管理のために公共の仕事に携わる者も、それに専念する必要はないはずで、⁽¹⁶⁾特権ではなくただの名誉でも与えられれば足りる。

3 コミュニズムと私的所有

労働者は資本を生産し、資本は労働者を生産する。労働者、即ち「商品としての人間」が、この運動の生産物である。（s. 523 第2稿）資本関係の再生産である。そして「私的所有が、いかに人間を左右することを完結するか、一番広い形をとれば世界史的な力となりうるか」（s. 533 以下第3稿）を論ずる。

3 — 1

私的所有の最初の形態である土地所有から発展して、近代資本制社会で私的所有が資本として完成する。「学」的把握にはこの道筋が繰り返される。（s. 533）「所有を排除するものとしての私的所有の主体の本質、労働と、労働を排除するものとしての客体と化した労働、資本とは、矛盾という発展した関係としての、

私的所有である。」そして「自己疎外〔自から進んで自分を自分から引き離して他人のものとする〕の廃止〔する道筋〕は、自己疎外と同じ道をたどる。」(s. 534) 先ず私的所有の最初の肯定の立場からの止揚としての粗野な Kommunismus から始まって、人間の自己疎外としての私的所有を積極的に止揚する Kommunismus へと到る。「人間による・人間にとっての・人間にふさわしい本質を現実^にに手に入れることとしての Kommunismus」へと。「この Kommunismus は完成された自然主義〔人間は自然であるという立場〕とりもなおさずヒューマンズム〔人間中心の立場〕であり、完成されたヒューマンズムとりもなおさず自然主義である。それは人間と自然との間の、また人間と人間との間の抗争のほんとうに解決であり、生存と本質との、自己を対象化することと自己を確認することとの、自由と必然〔不可避性〕との、個と類との間の争いの真実に解決である。」(s. 536) ところが初期マルクスと後期マルクスに関する基本点であろう。

ところで単に〔モノの所有の〕共同性を主張する Kommunismus は実際は私的所有の普遍化であり、いわば売淫の普遍化と同じであるにしても、この徹底した平等主義的主張はいつの世でも、まして現代では最も革命的である。資本制をまね分配のみを、例えば労働時間に応じて平等にというような主張に終るならば、実際の結果は私的所有の普遍化でしかなかろう。しかしまた官僚制的な全体管理の主張は、新たな特権をうみだすだけで、私的所有の別の形態を結果する。平等主義が、生産手段を含めて、個体的所有の再建にまで達せねばならない。個人が社会的となり、全体となり、各人が個性をもった「全体的な人間」となる。そこでは個体＝全体の確立のため、モノ的な成長は不要で静態化する他なかり。こうして歴史の意味は Kommunismus の生成とそれを考える意識の発展である。

避けらるべきは「『社会』を再び抽象物〔切断されたもの〕として個人に対して固定すること」である。「個人こそ社会的存在〔本質〕者なのであり、人間の個人としての生命と類としての生命とは別なものではない。(ss. 538—539) 人間はどれほど特殊な個人であろうと、まさにこの特殊性こそ彼を個人たらしめ個人的共同存在者〔個でありながら共同存在〕となる故に、全体であり「全体的人間」である。社会と人間はトタリテートでありながら、主体の面からは個体である。個性をもって (s. 539)。「内面の豊かさ」をおのれの外へうみだすために先ず「絶対的な貧しさ」へ還元されねばならなかったことが第一の否定

であり、私的所有の段階を一旦通らねばならない。その上で私的所有を積極的に廃止するのが歴史の全運動である。(s. 540) 否定の否定としての肯定である。

「社会制にある人間」を想定すれば、彼にとっては「いわゆる世界史全体が、人間的勞働による人間の造出、人間にとって自然が生成してくることより他の何のもでもないのだから、彼は自分自身による自分の出生、自分の発生過程を目にみえる姿で・争う余地もなく証明をしているわけである。」(s. 546) 否定の否定として肯定たる Kommunismus には、「人間にふさわしい解放と、現実の・その次にくる歴史的発展にとって欠くことのできない再獲得の契機である。Kommunismus はその次にくる未来のとらずにはいられない姿であり、エネルギーな原動力である。」(s. 546) しかし歴史の全運動の果てに描かれる完全静態のユートピア社会は、すべての歴史の段階をも等距離に見通す視座としての「方法的ユートピア」⁽¹⁸⁾であり、その故に常にその果てにくる未来として幻視され続けていく。「Kommunismus はそれ自体としては、人間的発展の目標——人間的な社会の姿ではない。」(s. 546) 解放はその営みの各過程の中で常に今ここでなされていかなければならない。⁽¹⁹⁾

3 — 2

こうして「見てきたものは、社会制を想定すれば人間の諸要求の豊かさはどのような意義をもっているか、従って新しい生産の様式にしても新しい生産の対象にしてもどのような意義をもっているかである。」それは人間にふさわしい本質の新しい豊富化であるが、この社会像から世界史を照射すると「私的所有の内部ではそれらが逆の意義をもっている」ことがわかる。(s. 546) ただ「私的所有の思想を止揚するためなら、頭で考えた Kommunismus で十分足りる。」しかし「現実にある私的所有を廃止するためには、現実的な Kommunismus への行動が必要である。」(s. 553) むろん歴史的運動の制限性についても目標についても意識し、更にそれを超える意識を獲得することは、一定の進歩である。役割の限界を指摘することは、同時にその限界内での有効性を認めることであらねばならない。⁽²¹⁾ 批判は往々にして否定の面のみが強く印象されがちであることに注意すべきである。

「社会——それがあの国民経済学者〔スミス〕にとって現われるままの——は市民社会であって、そこでは各個人は諸々の要求の固まりであり、個人の一人

一人は他人にとって、また他人も個人の一人一人にとって、ただ両者が相互に手段となりあう限りでしか現に存在していない。」(s. 557)分業〔労働分割〕は疎外の内部での労働の社会性の国民経済学表現である。「分業と交換とが私的所有の姿であるというまさにこの所にこそ、二重の証明、即ち一面人間にふさわしい生活はその〔生命の〕実現のために私的所有を必要としたということ、また他面それは今こそ私的所有の廃止を必要とするということの証明が潜んでいる。」(s. 562)そして再建される共同占有に基づく個体的所有では、各社会の規模は小さく、それぞれは基礎は自給的で、その上で自由な活動を営むようになる。『資本論』にいう「自由の王国」である。

3-3

こうして「自然主義〔人間は自然であるという立場〕とりもなおさずヒューマニズム〔人間中心の立場からみる見方〕が一貫されれば、それがどのようにして観念論とも唯物論とも区別され、かつ同時にこの両者を結合させる真理であるかということ」(s. 577)がわかる。そしてマルクスは世界史の営みと同じプロセスをヘーゲルの中に発見する。労働・疎外・再獲得という世界史の行程である。まさに疎外の「現象学」としてのヘーゲル哲学に関する稿の検討はここでは省略する。コミュニズムは、単純さへあと戻りするような貧しさではなく、初めて人間の本質の現実的な生成であり実現である。(s. 583)各人間がそれぞれ全体的にみる立場、また人間も自然の一部であるとみる立場が改めて要される。

実践 近代資本制の発展は常に矛盾を孕む。マルクスの時代と現代とではその発現形態は異なろうが。生産力の増大が直接的な労働力に関し節約的で、成長するほど絶えず失業を、潜在的失業をうみだす。それを解決せんとして更に成長をめざすことは、再び新たな潜在的失業を結果する。永遠に問題を先へ延ばすことでしかない。とすればこの究極的な解決は、社会の静態化が必要条件である。単に静態化だけでは十分条件ではないが。かくマルクスを解さねばならない。もしこの解が誤りであるとすればマルクスが誤っているであろう。そこでその解が正しいとすれば、社会はその果てに、ある発展を前提として定常的に安定していく。現実的には近似としてであろうが、定常的状态になる。既にスミスも『諸国民の富』でその時代の人民の最低の生活でも昔の王様以上で

あると書いている。現代ではモノ的には遥かに充足されている。個体的所有によって各個人が基本的に自給的になっていくならば、そこには基本的に失業というものはない。社会主義は文字通りで既成国家による境界つまり国境とは全く境いを異にする。それぞれがもっと小規模で「社会」として確定しう⁽²⁷⁾る範囲であれば足り、その社会の連合は遥かにユルヤカナ結びつきで足りる。

ところで、どの程度の段階であれ、その時の現状のまま静態化するのではなく、あくまで前提として平等が実現されていなければならない。地域的な不平等も解消されていなければならない。差別を固定化することでは不可能である⁽²⁸⁾。作為の果ては、単純に自然へ逆戻りすることではなく、更なる作為による新らたな自然への調和である。それには差異を超えての完全平等こそ人間にふさわしい。そこへ到る地道な努力の存在とともに、常に現象としてはカストロフィー⁽³⁰⁾、突発的破局の起こる危機を人類は今や全体として孕んでいる。諸々の問題は量的な増大が続く間は病理の症状は気づかれることが少なく、その結果としてある一定程度の進行を経て歴然と症状として現われる時にはしばしば手おくれの形で現象する。あたかも目には突然であるかのようにして。

問題は今や全体的である。政治経済学的である。「共存問題」は今や人類にとって「全体として」の問題となっている⁽³¹⁾。政治経済学の批判が要求されている。さまざまな問題がさまざまな面でカストロフィーとして現象しかねない危機の下にある。個体にも、家族にも、社会にも、国家にも、そして世界にも、更にはそれらが混合して等々。今までの歴史においても常にこの危機を孕んできた。だが、特に現代は人類史的な規模で、しかも他の生物をも道連れにしそのような形で危機を潜在させている。このような状況下の現代においては、経済科学的に考えられる諸条件をすべて入れて最適解をさがすような仕方では解決はない。そもそもすべての条件を入れることはおよそ不可能だし、どの条件を入れるかの選択が問題となり、更には条件そのものが常に変化していて一定しない。永遠に最適解を求めてさ迷うことで終る。逆にいえば、歴史のある瞬間に最適解が達成されているかもしれないが、それは知られないままに瞬時にして失われていってしまうであろう。「時よ止まれ、お前は美しいから。」(ゲーテ『ファウスト』)だが、時が止められない限り、最適解を求めるは徒労である。そうである限り、求めるべきものはむしろ簡単である。条件に応じた平等という近代社会での常識から全く発想をかえて、およそ差異があるからこそ、それ

を超えて徹底した平等を求めることであり、その上で社会を静態化させることである。個々人はそれぞれ偶然に運として担わされる条件の差異を、社会で全体として保険的に平等化することである。そこには発展がないとの反論があるかもしれない。まさにそれは静態化するのであり、それでこそ初めて無限に悪しき循環をする問題を断ち切り解決することができる。発展がそもそもア・ブリオりに望ましいかのようにみなす常識を疑え！静態化の実現した社会を想定して、そこから見れば、それは決して常識外れではなく、それこそ常識である。むしろその時・その社会からみて、別の・過去にあたる現代社会での発想こそ常識外れということになろう。吾々の社会でもかつての時代には、また吾々の時代でも別の社会では、吾々の時代や社会とは異なる常識をもつ社会・時代はあったし、また現にある。事情の強制によるままに静態化させられていくことになるか、危機を迎える前に進んで静態化していけるか。作為の在り方は果してどうなるか？物質的には欲求そのものならむしろ限りはあり、定常的状态を近似することは不可能ではない。だが非物質的・精神的な欲求は駆りたてれば限りなく増大しうる。これを制御できるか。できない可能性が残るとすれば、ここにもまたカストロフィーの危機を残すことになる。破局の危機は国家内にも国家間にも存在する。果して、この果ては如何？

いま感性が要求されている。理性をとえざる者、批判をとえざる者に、そもそも差別的感性のない場合、あるいは被差別の感覚はあっても別の面での差別の存在することの感性のない場合がしばしばある。「絶対的プロレタリア化」⁽³²⁾の貫徹する現代では、万人がまさに何らかの程度で差別・被差別、搾取・被搾取の二面性をもってきている。現在ではこのことの自覚が先ず必要である。また他方、他者の否定面のみならず肯定面も正当に評価する感性も必要である。⁽³³⁾理性的に判断するのはよい、否むしろ必要である。そして自己の判断のあくまで主観的であることの自覚は必要である。しかし理性の名の下に、権威に盲従したりさせられたりするのであってはならない。各個人の自主的な判断、主体的な判断が必要である。客観的とは、別の個人の主体的な判断を自らの判断の検証のためにまさに主体的に利用すること以下でも以上でもない。その名の下に主体的な判断を放棄することがあってはならない。主観を廃除することではなく、自己の判断があくまで主観的に留まる限界のあることの自覚が保たれていけば足りる。客観的に権威に従うのではなく、むしろ主観的に自ら考える主

体性が要求される。人類が滅びても地球は存在しようし、またたとえ地球が崩壊しても宇宙は存在し続けるだろうが、このような客観的な判断が何の意味であろう。個々人が主観的に判断し、それを寄せ集めて検証し合うことこそ大切である。理性の越権と棄権とが防止されねばならない。先ず現在では理性の基礎に感性が要求されている。多発する諸問題の存在を感知する感性が。

「だからある対象であり感覚する存在としての人間は受身の存在であり、かつ彼の受身を感知する存在なるが故に、情熱をもつ存在である。情熱、熱情は、人間がおのれの対象にむかってたくましく追ひ求める本質的力である。」(s. 579)

(注)

- (1) ワーグナー『ニーベルゲンの指輪』において女神エルダーが主神ボーダンを戒める言葉。弱者にこそ相対的的正しさのある場合は多いが。
- (2) 拙稿「政治経済学の批判と労働価値論」『一橋論叢』1973年7月第70巻第1号以来一貫して試みを続行中である。それでもその間には筆者自身にも微妙な変化をしていることは感じられる。初期マルクスについては、拙稿「マルクスとエンゲルス——政治経済学の批判——」『経済評論』1973年4月第22巻第4号及び「政治経済学の批判と方法的ユートピアの史的考察2」『一橋研究』1980年3月第3巻第4号参照。断っておくと 筆者には、アカデミズムを何か特別に権威あるものとして、非アカデミズムと区別をする必要は毫もないもの、と思われる。自らが何が正しいかを判断するのみである。そしてそう判断したら 何であれ「勝手に」活かすことを考えるのみである。
- (3) 草稿たる所以で本稿は引用が多くなっている。以下『経哲草稿』の参照はすべてMEGA第3巻の原典頁を各引用箇所の後ろにカッコをつけて、(s. —) のようにして示す。なお訳文については かつて鈴木秀勇氏に学んだことを筆者なりに活かして使っている。氏の訳の在り方について またマルクス理解にも関連して、一橋大学『社会学研究』での一連のルソー「エミール分析試論」等を参照のこと。
- (4) ともあれははっきりしているのは、何よりもマルクスは反貨幣・反分業・反資本であり、反権力・反権威であり、そして反国家等々であつたろう。一部にみられるような専制政治的な形態など思いもよらなかったであろう。
- (5) 例えば、自己に何かある才能が欠如している場合でも、その才能を他人から買うことができ、そうすればそれは自己の才能であることになる。(s. 564—565) また例えば 勉学の適性がなくても、それをカネで買うことができるし、逆に勉学の適性があってもカネがなければ、それはないということにもなる。(s. 566) 更にコネなるものでカネに代用することもできるが、逆にまさにコネなるものがない場合にもカネがあればそれを買うことができる。このことは 勉学の

機会についてよりも、就職競争について非常に顕著である。コネもカネに換算されて、やはり一切はカネが支配する。さらに学歴とか性別とか等々による差別についても同様である。

- (6) Quantitätについては、ジンメル『貨幣哲学』で、あらゆるモノが質と量とをもつのに対し、貨幣は量のみをもつ純粋量であるとされている。
- (7) 以下時々こういうように想定されて、社会＝歴史の測度基準となる社会像を方法的ユートピアと呼んできている。マルクスにおいて初期から後期までこの方法はとられている。前掲および後掲の諸拙稿参照。またおよそ思想史上にはこういう批判の方法は多くみられる。例えばヘーゲルでは、究極に世界史があり、ここから一切を逆に眺めている。「国家は国家として相互に依存しない〔自己完結性〕、それ故諸国家の関係は外面的な関係たりうるにすぎないから、両者の上に立ってこれらを結び合わせる第三者が存在しなければならなくなる。ところでこの第三者というのが、世界史のなかで現実性をあらわして諸国家を裁く絶対的審判者をなすところの精神なのである。」(ヘーゲル『法の哲学』§ 259 追加) 拙稿「政治経済学の批判と方法的ユートピアの史的考察」『一橋研究』1979年9月第4巻第2号も参照。
- (8) 「個体的所有の再建」については、拙稿「資本制的蓄積の一般法則と歴史的傾向」『一橋論叢』1973年10月第70巻第4号参照。
- (9) 現在失われているものは この瑞々しい「感性」ではなかろうか。
所有 Eigentum = Property (自分のものであるということ) とは、スミスがロック『統治論』から受けついでであろう概念である。人間はそもそも自分自身の person (身柄) に対し Property をもち、この person の働きが labour であるが故に、labour が混じり合わされたものによって Property が拡大する。こうして労働の所有権が基礎づけられる。
- (10) 例えば、ヨーロッパ封建制は人力を直接使うのではなく畜力を使うことで余剰生産物をうませ、権力者はこれを収奪していた。これに対し、古代の奴隷制では、奴隷という人力を直接大量に投入することで余剰生産物をうませ収奪していた。更に近代資本制では、やはり人力を直接にではなく、機械・技術を大量に投入して、余剰生産物をうみ収奪しており、人力の投入は大量だが間接的になってきている。エントロピーの増大をより急速にしつつある。注26参照。
- (11) 『資本論』第三巻の三位一体論の展開が参照さるべきである。また拙稿「資本制社会と『自由の王国』」『一橋論叢』1975年5月第73巻第5号参照。
- (12) 注8の前掲拙稿参照。
- (13) ヘーゲル自体 その市民社会論(特に「欲求の体系」)はスミスから学んでいるであろう。ヘーゲル『法の哲学』第三部第二章(特にA)参照。
- (14) 「人間の疎外 Entfremdung」とは、Entfremdung が動詞的名詞であるから、「人間を疎外すること」という意味である。このように他動詞の名詞化したものとの「の」(von や 2 格, 英語では of) の後の名詞がその目的語を表わす場合がある。英語の例としては、リンカーンの有名な言葉 “Government of the people, by the people and for the people” があり これは普通「人民の、人民によ

る、人民のための政治」と訳されるが、このように government を政治と訳したのでは、「人民による」と「人民のための」に対して「人民の政治」とはどう意味で解されているのであろうか。government は「統治すること」を意味し、「人民を統治すること」とこれは解されねばならない。そこで先の言葉は「人民〔自身〕を、人民〔自身〕が 人民〔自身〕のために統治すること」という意味を表わしている。日本語の「政治」という言葉は、少なくとも一般には「政治すること」という他動詞的使い方はできない。ともあれ、こう解することで 支配・被支配が一致するという民主主義の原則を表わすこととなる。むしろこのことは訳の問題で、内容どうりに民主主義の原則が実現してきたか、あるいはおおよそ実現し得るのかの問題とは全く関係がない

(15) この後「非労働者の側の疎外」についての分析に入るものと思われる所で「疎外された労働」の稿は中断されている。『法哲学批判序説』の終り、プロレタリアートの解放が人類の解放となるという規定へと連なっていくであろうと予想される。

(16) 『資本論』第三巻での「自由の王国」論における「完全制御」と「最少費用」の規定が参照されるべきである。注11の前掲拙稿参照。

また指導者であることが名誉ではあっても決して特殊権益を伴うものでなくむしろ責任ある重荷としてあった社会はかつてあったし、また現にある。

(17) 既に指摘した通りこういう想定がしばしば現われることが留意される。注7参照

(18) 前掲諸拙稿参照。また注7参照。

この社会では、各個体に固有の所有が再獲得される。所有の意味については、注9を、「個体的所有の再建」については、注8を参照。

(19) 「共産制を求める手工業者たちが結社をつくるとき」の例をあげて、「この団結によってある新しい要求、仲間であること Gesellschaft の要求を自分のものとするのであって、手段であると見えるものが目的となっている。」(s. 553) ことが指摘されている。

また例えば、M. シュテイルナー『唯一者とその所有』参照。現代においては解放への営みの最大の試みの一つは、脱組織にこそある。注25参照。

(20) 注7参照。

(21) 「欠陥を見つけ出す方が肯定的なものを概念において把握するよりはたやすいために」(ヘーゲル『法の哲学』§ 258 追加)。そこで「国家は地上に立っており〔つまり、誤りうる〕、従って恣意と偶然と誤謬の圏内に立っている」のだが、肯定的なものである生命は、こうした欠陥にも抱らず存続しているのであって、この肯定的なものこそここでの問題なのである(同上)という。ただ「国家は人為の作品ではない(同上)というのには疑問が残る。また「初歩の教養はきまってあらさがしをすることからはじまるが、できあがった教養は何事の中にも積極的肯定的なものを見る」(同上、§ 268 追加) などという表現には、正しさの含まれている中にも、ヘーゲルの尊大さが現われている。まさに理性の哲学者であって、感性に欠けている著例といえる。

(22) 注16参照。比較優位の法則が解釈し直される。

(23) 注7参照。

(24) この最後の付稿(「序言」によれば、「終章」になるはずのもの)「ヘーゲル弁証法および広く哲学の批判」は、いままでのことを「理解しその正しさを知るために、ヘーゲルの、広く弁証法も、またとりわけ現象学および論理学でのその〔弁証法の〕適用も、最後に近時の批判の運動の〔ヘーゲル弁証法との〕関係も、若干のあらましを指摘する」(s. 568)と始まっている。この稿の検討については、マルクス『法哲学批判序説』の検討とともに、更にはヘーゲル『法の哲学』などとの比較検討とともに、後の課題とする。

(25) 水が豊かで、それで森林も豊富である。また森林の緑が多いから、水が豊富に蓄えられる。更にそれで土も肥沃になる。その土地を水田にするから、また水が豊かに蓄えられる。そこで日光も豊かだから、作物はよく育ち、放っておけば雑草がはびこって作物を負かせてしまう位に環境がよい。また豊かな緑は、太陽エネルギーを生物に利用可能なエネルギーにかえると同時に、酸素をうみだし、生物は(動物も植物も)それを利用してエネルギーを生活に活用している。酸化はまさに火を燃やす原理である。それで増大するエントロピーは水を利用して捨てている。これが日本の自然である。

近代文明は、西洋で生まれ(鯨油不足や木材不足により)偶然としてできた石炭・石油文明であるが、日本においてこの文明が急成長したのは、上記のような自然の良い環境のためであった。何よりも水が豊富であったからである。日本には石油はなかったにもかかわらずである。石油は石油を使って運んでくれる。しかし水は水を使って運んでくるということではできない。そのために、逆にアラブなどでは石油は大量にあっても、近代化がなかなか進まないことになる。資源の意味が再考されなければならない。日本は資源のない国だとばかり言われてきたが、果してそうか。それは近代文明を自明のものとしてきた、近代日本の最大の錯覚の一つである。ともあれ、土の表面をコンクリート状のものでおおう結果になっているものは一切が、日本の優れた自然の条件を破壊している結果になっている。

まだ、あるいは既に、日本におけるような優れた環境の下でなら、近似としての社会の静態化は可能である。社会を確定するためには、個々人がドロップアウトすることのあるのに対し、むしろ社会は寛容であらねばならない。個々には動態的となることの余地を残して、全体としては静態化する。定常的に安定した状態となる。ルーズな余地を残してこそ社会の全体と個体とは確定しうる。以下の注26も参照のこと。

(26) 「定常の状態」という言葉自体は既にイギリスの古典派経済学においてもみられる。例えば、J.S. ミル『政治経済学の原理』参照。

この静態社会においてこそ、エントロピーの増大を制御できよう。第三次産業革命とか脱工業化社会とか情報社会とか等々とよばれる現代にあっては、資源の浪費とエントロピーとは一段と増大しつつある。増大が加速度的になっている。

植田敦『資源物理学入門』, 室田武『エネルギーとエントロピーの経済学』等参照。

ところで、この大数法則としての古典熱力学的エントロピーの概念は、情報理

論におけるような比喩的エントロピー・統計学的エントロピーの概念とは全く別のもので、両者は混同されてはならないというが、しかし注意深く混同を避けてならば、デタラメサの程度をあらわす社会エントロピー的な考え方も有効な面があるのではないか。ただし適当な言葉があれば、それに変えた方がよいのかもしれないが。

ともかく情報社会の進展は、一見資源節約的にみせて、実際は一層資源浪費を増大させよう。エントロピーの捨て場のなくなる前に、「小さいことはいいことだ」。また現在では、例えば、食糧が、極めて長距離・大量に輸送され、大量に消費されている。食糧は、本来このようなものに適さない。にも抱らず、これを成立させるためにどこかされている諸方策がいろいろな弊害をうんでいる。食糧は生産された地域の周辺近くで、しかも保存食でなければ、早い時期に消費できるようにならなければ、多くの弊害をうむようなことをしなくて済む。大量方式を実現しようとしてたてるさまざまな対策がより大きな弊害をうむという近代の悪しき循環を断ち切って、近代文明の問題を解決するには、やはり「小さいことはいいことだ」。

- (27) さしあたり日本などは、一億をおえる人口を一つの中央集権的な国家にしておくのは止めた方がよからう。地域の特色に応じ地域の独立をより強め、それによって一層その特色を出させるようにし、全体は連邦共和制にでもした方がよからう。
- (28) いわばシャカの説法になってはならない。シャカは若い頃酒池肉林に溺れ、その果てにそんな生活の虚しさを悟ったとかで、それ以来そのことを他人に説教するようになったらしいが、しかしそれを一度も経験したことのない者にはそうならないと虚しさは悟れないであろうし、また虚しいとは予想しない者も多からうし、更にはそう予想はしても一度は経験してみたいと望む者も出るであろう。どちらにもそれぞれに理のあるところはあり、そこで人間は常に後悔の形でしか悟るということではできないのかもしれない。これは個々人のレベルにおいてだけではなく、先進地域と後進地域、さらには先進国と発展途上国との関係などにも 拡大してあてはめられよう。ここにまたカタストロフィーの危機のなくなる理由の一つがある。やはりこれを解決するには徹底した平等の実現をするしかなかろう。平等を作為するのである。
- (29) 自然科学についてマルクスは述べているが、一般に科学は「それだけ一層実践的に、産業に介して、人間生活の中へ食いこんでこれを変形し、人間にふさわしい解放を準備したのである。たといいくらそれがとりもおさず非人間化を成就せずにはいなかったにしても。」(s. 543) しかし準備が終わったら科学は変わる。とまれ「感性がすべての科学の土台でなければならない。」(同上) これは確実である。
- (30) 例えばいわゆる公害問題もそうであり、人口過密や異常気象の問題などもそうであり、そして世界的には第二次世界大戦後も戦火のやんだ時のないことが重大である。
- (31) 「政治経済学の批判」の意味については、注2の最初の拙稿参照。

③② 注8の前掲拙稿参照。この「絶対的プロレタリアート化」の傾向が極度に進んでいる現代では、支配・被支配の根拠は、単に才能や財産などであるよりも、遥かに組織に依存している。権力も権威も組織を離ればタダの人となり、せいぜい元の字のついた権威の残影をつけているだけとなる。

③③ 注21参照。

③④ 果してマルクス自身はどれほど感性を豊かに持ち合わせていたのかは定かでない。ただ行動も思考も極めて人間的であったことは確からしい。

「もし君が愛して、しかも相手の愛をよびおこさないとすれば、即ちもし君の愛することが愛することとして相手の愛をうみ出さないとすれば、もし君が愛する人間としての君の生命を表に出すことで君自身を、愛された人間にするのでないとすれば、君の愛は無力であり不幸である。」(s. 567) 人間が対象と結びつかねばならず、金で女を買うことのように、貨幣で切ってしまうのでは、人間にふさわしい関係は成立しない。切っても切り離せない Individualität の上に Sozialismus が実現する。

筆者の住所：〒190-12 武蔵村山市中藤 1460 村山アパート 92-403